特240
896

449

八七十娘

國民書院發行

始

娘十七八

乙女心

女の單純なる時代は何うしても十二三歳迄での乙女時代である。この時代の單純さと、至純なとは他に一寸類例を認めることができない程に美しい夢の結晶である。

一寸したことにも心からの涙が溢れる。すこしのことにも嬉しい喜びが滿ち〳〵する。その少こしのことにも笑ひ、悲しむ乙女時代は、女の至寶で、女の謎としての最高價値のある時代である。未だ春知らぬ乙女、戀を知らぬ乙女、その時代の女の特性は、この世の中の最大幸福

昭和七年 帝國圖書

時代であらねばならぬ。その美も、未だ粧はぬ美、つくらぬ美、求めぬ美、僞らぬ美、媚びぬ美で、至純そのまゝの美である。女の花であると共に、人生の慰めの至高なるものである。若し、女がその十二三歳の美しい時代がないとしたならば、餘りに女の一生は醜であり、虚僞であり、愚劣であり、悲慘である。男の少年時代に比して女の十二三歳程、謎深く、つゝましやかに、女性美を發揮するものがない。小鳥や花の蕾は、迚ても人生の最大幸福たる乙女時代に比すべきものでない。

口十六七の娘盛り

乙女の清い姿も、十六七歳の知春期に至つて、破壞と呪咀とが襲ふてくる。十六七歳の娘盛りには、ハチキレさうな女性の美點は現れても、反對に、乙女としての神々しさより、一歩虚僞の美の方へ近かづいて來てゐるのだ美しいといふ、その美しさは多く人工美であつて、清さを汚した化粧の美である。けれど、女としての美しい盛りといふならば、仍旦この時代が尤も美しい得意時代であらねばならぬ。

謎の世界の乙女より、處女としての誇りを感じる道程には、既に、やがては處女でないといふ豫感ももたされるものである。この時代の女の美しいのは魅惑的である。若し、女の十二三歳が女一代の幸福時代であると假定さるなれば、女の十六七歳は女の得意時代といはなければならない。

艶かに色づけられた其の肉體、ふくよかに發達して行く曲線美、さては房々とした綠の黑髪、すべてに羞恥と、謙遜とをなひまぜにした態度、そして媚を含む瞳、花をの如き唇、すべてがこれ女一代の中の尤も美しい極致

時代である。そして愛の讃美とともに、女の柔かい、先天的の惱ましさに、猶ほより以上の哀愁を添へる時代である。

女の知春期……それは謎の世界から解悟の首を、少こし擡げてきた時代で……女の美しい最高時代であるのだ。『春はみじかし戀せよ乙女……』と唱つてゐるのも當然で、總て得意時代は短かく、失意時代は長い女性でも男性でも、その得意時代は極めて短かいもので女の誇り、處女としての誇りも全くそれで、本人自身の誇りを感じぬうちに、その誇りの多くは、無意味に破れ

て了ふ。それが乙女としての誇りの最後で、歡喜と絶望との兩極端におちる時である。一方、處女としてのプライドは破れても、女性としての華かな長い道程はこれより始まるのである。これは幸か不幸か、その女の運命は論ずるに足らないが、要するに處女としての誇りは極めて短かい。その短かいうちに於てこそ、始めて、誇るべき處女の得意があるのではあるまいか。長い振袖に包むその胸のほとり、乙女の夢は永遠に圓どかに、そして靜かに浪の韻を傳へるに限る。

ロ女の二十歳

成熟しきつた女の二十歳……それは累卵の危ぶさに齊しいもので、その處女を猶ほ二十歳に誇り得るならばその女性は幸福である。女の二十歳は男の二十五歳と齊しく、その處女たるも、男の童貞と同じ意味に於て、尤も有意義なものであらねばならぬ。

十二三歳が幸福時代で、十六七歳が得意時代であるなら女の二十歳は危險時代であらねばならぬ。と同時に歡喜時代であらねばならぬ。

女の十六七歳は未だ知春期であつて、相當男に對する理解とか智識とをもち合はさない。男の何ものであるかの凝視をつづけるには、餘りにもろく、弱く、羞かしいために折角の男なるものを空想するに過ぎない。突き進んでの解釋が能きない。それに比すると、女の二十歳はそれだけ大體に、男を知ることが能きるのである。可なりの理解もできてくる。朧ろながら、男に對する女の立ち場、女の地位といふ風なことまで意識することができる。なまじいに男が分るために、却て、女の二十歳時代は危險となる。即ち歡喜時代か、戀の讃美となつて、往々に

して自らを冒瀆して了ふのである。われから戀の深淵に身を投じて了ふのである。それは誰れしもがそれであるとはいへないが、火の樣な戀をするのに、この時代が餘程ふさはしい。

十六七歳で戀を知り、男に接觸する女があつても、その戀は火を發しない。火を發する迄に力の足らないうらみがある。戀には熱があるが火を發する程度が違ふ。即ち若い時代の戀は、戀に燃へるだけであつて、高熱、若しくば白熱化しない。それには未だ世間の恐怖をもつからである。けれど二十歳になれば可なりの度胸も生じて

その對社會觀も乙女時代とは違つてくる。或はそれだけ打算的に流れることもあるが、概して二十歳時代の戀は高熱である。灼熱する。沸騰する。それであつてこそ、女の成熟、爛熟、した時代であるのだ。敢て生理的にのみいふのではない。

口女の二十四五

女の二十四五は情慾より一歩理智的に踏み込んだもので女の怖ろしい時代である。相當の男の智識を得、男の價値も評價し得られる時であるから、女としての迷ひ易き

そして、迷ひ難き時代である。惚れても、惚れられない時代、切れても切れられない時代……これが二十四五歳の女に多い。

若し二十四五歳にして猶ほ處女を誇る人があればその人は決して生理的にも、人生の意義の上に於ても幸福ではない。二十四五では至純なる戀も、愛も、味はふことができない。それには處女としての誇りはあつても、その女の特性には處女としての純なる心もちに缺げてゐる。必ず疾患的痛手を帶びた、變質性の女になつてゐる。尤も宗教的に操守する女もあるが、いづれにしても女の本

能から、そこなはれた點が存在するものである。

女の二十四五……女としての三十二三……女盛りであり、男の稍寂寥を顧みる時である。ふり返つてみる昨日迄での若さ、美しさ、それを思ふと今日の自分が稍々老ひて淋しい樣な氣がする。それが二十四五の女が自覺した時の淋しさであり、悲しさである。と同時に、男を知ることの歡喜に充滿する時代で、男に失望を抱くのも斯の時代である。故に、可なりの地盤を拵さへて滿足が出來ないならば不幸を招來すべし、若し子供でも產むならば、それで絶對の安心を得る時代でもある。いは

ば女としての禍福の分岐點で、右にしても左にしても、その相當苦慮することのできる智識と餘裕とは生じてゐるのである。

口女の三十代

男が三十の聲を聞いて一人前と自覺し得る程、女は三十の聲を聞いて恐れおののく。それは男が對社會的に自己を認めさす年齡に達したことを喜ぶと反對に、女は再び回へられぬ娘時代を振り返つて初老の淋しさをもつものである。三十の聲を聞いて、女一人前であると自覺する

女は、殆どあり得ない。『あゝお婆さんになつてしまつた』といふ悲嘆と寂寥より以上は、餘り出ない。それは女が對社會的の信用を得る必要もないのに起因もするしそれと同時に、いつ迄でも若かれ、美しかれの女としての標語にも準ずるからであるのだ。

男の四十、女の三十、共に初老を感じるのは均しい。殊に女の三十は愕然として夢がさめる樣である。これは素人にも稼業人にも齊しい現象で、決して稼業人だけの述懷ではない。反對に、三十の聲を聞く女の性格は一變して絶對に男に縋るものと、絶對に男に縋れないものとの

二樣に變化して行く。

絶對に男に縋るのは初老を感じて、もう駄目である、と自己の意志を男の前に投げ出して、一生連れ添はねばならないといふ愛よりは……弱い女の特性から諦めと縋りつく遣る瀬なさとが生じる。それは女としての美點で先天的養れた女の性格である。

反對に男を信頼せぬのも此の時代である。それは餘りに男の缺點や不信用を知りぬくがために、何うしても男を敬し、愛し、縋る感じが出てこない。男の忌まはしい方面ばかりが眼について、男を心から信じることができな

くなる。そこで自立自尊主義になつて、一個の變性女となつて了ふのである。強い男の意志をもつた女となつて了ふのである。幸か不幸かは論ずる限りでないが、女としては失はれたその特性に對し、少なくとも不幸といはねばならぬ。決して幸福ではないのである。よし、男が不倫非行をしても、その爲めに男から離れて了ふ女性は自己の爲めに、自己を亡ぼすもので決して賢こい遣り方ではない。

けれど、三十代の女が一度惚れると、それは眞劍である同じ火花を散らしても、乳くさい娘時代の火花ではない

その火は必ず觸れるものを燒いて了ふ。必ず灼熱する。これは考へて、考へて、後の戀であるから三十代の女の戀は眞劍であり、献身的である。生命がけの戀……それは誰れでも味はれるものであるが、二十時代の生命がけと、三十代の生命がけとは、その苦しみの上に大なる隔たりがある。同じ生命をすてても二十代の夢の樣な死に樣はしない。其所には理智の閃めきを、動かすことのできない力强い情炎の結晶があることを見のがしてはならない。

その三十女の缺點は、一度墮落すると、投げ遣りの戀を

することがこれである。世間も義理も思はない。羞かしさも怖ろしさもない。直線の戀をする。往々にしてこの時代に身をあやまるものがある。それはなまじい男の味を知りぬいてゐるからである。男子の缺點も美點も熟知した結果、その危險におちて行く、これが三十代の女に多い。世俗に二十後家は立つても三十後家は立たないといふ。それらも一面に此の眞理が加味せられてゐるのだ

口弱い女

女は一貫して女いものである。『弱きものよ、汝の名は女也』と西歐の諺にもあるとほり、何うしても女は弱い特性をもつてゐる。それが乙女時代、娘時代、女房時代、になつても何うしても弱いところのあるのは女である。

弱いといふのは、敢て男子から比して力が足らないといふのではない。柔順であるといふのが弱いとよばれるのである。強い男子に縋りたい、たよりたい、その心もちをもつことすら女としての弱さである。男子を突き轉かしても、女としての地位を領有したいと思ふ女のあるのはそれは萬々が一の出來事で、その強い女すらも、一つ

強い男があれば縋りたいのである。決して、女は孤獨で爲すべき先天的をもち合はさない。それが自然に、女や弱いものと認められて來たのであつて、女の美德も又其所に存せるのである。

女は絶對に服從性をもつてゐる。歐米の女はさうであるとは言へないが、慨して東洋の女はこの觀念に久しい間培養はれてゐる。その爲めに、東洋の婦人は柔順であるが陰氣である。活氣に乏しいと。いふことを聞かされるたしかに日本人の女性には斯の批評が當つてゐる。併しこれは、女本來の美點からいつて、跳ね上りものよ

りは淑やかなのがいゝのである。出過ぎものよりは、控へ目勝ちの方が殊勝である。男に突つかかつてくるよりは從ふてゐる方が世間的にも見易いものである。けれど屈從をする女は可けない。それは服從性より惡化した、女そのものの品性の下落であり、低下である。常識によつて男の無理解を思ふ時は、女としての屈從は意味をなさない。けれど、女としての條理であると思つて、男の非行をあばくのは、これは往々にして誤り易い自己判斷におちて、共に破滅をまねき、男女共に失望するものである。屈從はしてはならないが、さりとて男を無理解の

まゝに侮辱を與へるのは考へごとである。世間の女にこの役者が多い。そして女をさう思はしめて誤らしめる男も、又倍して多いのは爭へない。男は女を愛し、女は男を信じる、それが虚僞でない限り絶大の愛であり、幸福でありするもので、其所には假想の何ものも許さない。即ち愛は絶對であり、虚僞は破滅の根定であるからだ。

口强い女

男を男と思はぬ女……それは偶まにある。素人でも藝者や娼妓にもある。決して男を信頼しない。男まさりの氣性をもつてゐて、己が思ふまゝに振る舞ふ。男から見ると、一寸癇癪の觸はるものであるが、その强い男の中にも、絶對に强い女と、我儘で强い女、そして强いといふは外面で、非常に弱い特性をもつ女とがある。絶對に强い女は何うしても男性的である。石女に多い生理的缺陷ともいへるが、その境遇によつて動きのとれない特性を涵養せられる場合がある。中にも可憐な男子を反對に玩弄物視して、その性能を放縱に發揮する女がある。一種の變態性慾を有するものといつてもいゝのである。

困つたものは吾儘から強くなる女で、これは手足に及ばないことがある。總てが自己本位で吾儘のありたけを盡して得意がる。男として極めて有難迷惑でもあり癇癪にも觸はる。この種の女に智識階級と、絶對に教養のない女との兩極端がある。自己の智識慾によつて男を信じない結果、自己妄想にかかつて吾儘を主張する。この女は子供を産む産まないよりは、それ以上に自己を信じてゐないのである。教養のない女の吾儘と來ては亂暴狼藉であるのは論を俟たないが、一片、稚氣の愛すべきところも含まれてゐる。前者に教育家が多く、後者に玄人が多

うい。どちらも女としての特性があり過ぎるのである。今一つは強さうに見へて案外跪ろい女、こんな女が玄人に頗る多い。所謂意志で活きてゐるので、決して心からの男まさりではない。人情とか義理とかにかかると人並以上に苦勞もし、心配もして涙を以てそのことに當る。いはば涙を包んだ女の強さである。こうした女も素人よりは稼業人に多いのは事實で、その境遇から斯うした態度を植ゑつけるのかも知れない。そして斯の三態三樣の女に交際をつづけて行かうとするのは、何うしても最後の涙の多い強い女が一番に樂であり、そして同情も厚

い。一番困るのは我儘をいふ教育者で、女の出過ぎもの程荷厄介千萬なものはないのである。

口話し上手

女に好かれる條件が第一に男の風貌態度であるならば、それを間接に助け、直接に重味を加へたり、輕卒に見せしめたりする話し振り、會話の上手下手も又重大なる關係がある。

いつたい男は昔から口數の少なきを善しとしてゐる。多言な男は概して薄つぺらで、嘘言家が多い。そのために

昔の武士は多く語らない。必要に應じて、その事の根本だけを話して決して餘枝に亘ることをしない。故に一面にムッツリとした變人氣質もまじつてゐる。けれど、男子として決して洒辯らないのを自慢することは出來ない相當の能辯でなければ社會へ立つにも困るし、殊に女との交際場裡では、猶ほ一層雄辯の必要がある。

由來女は多く男子に比して外出をしない、書見するにも數少ない。そのために何かな眼新しいこと、興味のあることを聞きたがる。人情であるのだ。そのために女子は多く男子との會合の場合、男子の口から世間の事を聞

きたがる。此の際ムッツリとしてゐて、

『話しなんかありません』

と言つてしまつては忽ち女の感情を惡くする。やはり相當自己の見聞したことの話しの中で、女子向きなのを選定して、一ト通りは說き聞かすだけの辯說は必要とする敢て、無駄口を洒辯り、碌でもないことを滔々とノベッ幕なしにやれといふのではない。必要に應じるだけの能辯は要るのである。

『あの人は話し上手だわ』

と、言つて其人が同座せないと淋しい感じを抱かせる人

がある。既に話術によつて一歩女に接近した傾きがあるといつて話し家や講釋師でない限り、能辯を賣り物にする必要は更にないが、自己の信頼程度を、密接に見せつけておくのも交際場裡での一特策であるのだ。

口話し下手

俗に口下手といふ人がある。同じ挨拶をしても、その人の挨拶は何んとなしに厭味に聞こへたり、他人に好感をもたなかつたりする。本人は心では然うではないのだが既に心にないことをすら言つて了ふ。全く口下手の結果

であるのだ。自分が心で然う思つてゐない事を、口下手から他人に惡感を抱かせると、他の人もいゝ氣はしないから氣拙い思ひをする。口手下の人も心で思つてゐないのだから猶更厭やな思ひをして益々口下手振りを發揮してとり返へしのつかないことを言ひ切つて了ふ。

商賣人などで此の口下手の人が成功したためしがない。何うしても顧客をおとすのである。ましてや男に接すると案外纖細な女性となると、對手方の會話によつて種々と喜んだり悲しんだり怒つたり笑つたりするものである。その時に口下手先生が、何とかして何とかした風に

ブツキラ棒の挨拶でもしやうものなら、大抵の女は降參してしまつて二度と其の人に接しやうとは思はない。

『あの人にも困るわ』

と、いつて顔をしかめる。いくら風貌が立派でも口下手から生じる利害關係は餘程多きい。けれど口下手といつても世間馴れない人の口下手は、極めて愛嬌のあるもので、時々、女はその無邪氣な、世間馴れない物語りを喜ぶものであるが、相當の年輩であり、可なり世間を知つてゐる人の口下手と來ては寧ろ憎惡はしてもそれに敬意を表しさうな筈がない。

娘十七八（終）

內務省納本濟

昭和七年十一月二十日印刷
昭和七年十一月廿五日發行

大阪市東淀川區木川西ノ町三ノ三三
編輯兼發行者　宮本彰三

大阪市西區阿波座上通三ノ三九
印刷者　國民書院印刷部

不許複製

大阪市東淀川郵便局前
發行所　國民書院
振替大阪六九五七〇番

終

大阪
國民書院
發行

4
了